

異邦人の庭

刈馬カオス

【登場人物】

火口 詞葉 ヒグチ コトハ
一 春 ニノマエ ハル

剥き出しの劇場。舞台には何もない。

開演時間になると1人の男が現れ、長机を客席から見えて縦に2つ、隙間なく並べる。

次に、その隙間に、白いテープを貼る。

それは、2つの机を繋ぎ止めるようにも、2つの間の境界を表すようにも見える。

パイプ椅子を上手と下手に1脚ずつ、向かい合う形で並べると、下手側のパイプ椅子の脇に鞆を置き、腰を下ろした。

(右記は初演時の指定であり、上演環境や演出プランによって必ずしも守られるものではない)

【1】

その男——春は、相手が来るのを待っている。

自分以外に誰もいない部屋では、時計の秒針の音以外、何も聴こえない。

顔のこわばりから緊張が、そして落ち着きなく周りを見る様子から初めて来た場所だと分かる。

ふと、目の前のアクリル板が気になった。(それは実際にはないが、白いテープの真上にあると想定される)

触れて良いものか迷いつつ、それに手を伸ばし、触れる。冷たい感触。掌で少し強く押してみる。と、上手から物音がして、慌てて手を引っ込めた。

現れたのは、明るい髪色に、ラフな白シャツを着て、サンダル履きの女——火口詞葉。慣れた様子で歩みを進め、春の向かいに立った。

詞葉 火口詞葉です。

春 (慌てて立ち上がり) あ、どうも。えっと僕は、

詞葉 なんて読むんですか？

春 え、

詞葉 お名前。イチ、ハル？

春 ああ、ニノマエハルです。

詞葉 ニノマエ？一って書いてニノマエ？

春 一は、二の前だから。

詞葉 ああ。小鳥が遊ぶって書いてタカナシさんみたいな。

春 それです。

詞葉 月が見える里って書いてヤマナシさんみたいな。

春 そうですね。

詞葉 四月一日って書いてワタヌキさんみたいな。

春 そういうマニアなんですか？

詞葉 ……すみません、いきなり。

春 いえ、必ず聞かれますから。これでも本名なんです。

詞葉 そうでしょうね。支援者の会に偽名で入ったら大問題ですから。

春 たしかに、何度も確認されました。

詞葉 以前、雑誌記者が潜り込んだらしくて。

春 そんなことが。

詞葉 私は後から聞いたんですけど。あれ以来、古本さんが神経とがらせて。あ、古本さん、分かります

春 よね？

春 ええ、ここに来たのも古本さんに言われて。

詞葉 わざわざご足労ありがとうございます。

春 あ、いえ、

詞葉 (斜め後ろにいますであろう職員に声を掛けられ) あ、はい。(春に)すみません、座らないといけ

ない規則なんです。

春 ああ、はい。

2人、座り、改めて向き合う。

どこから話し始めるか互いに迷い、微妙な沈黙が流れる。

詞葉 ……ここ、

春 え？

詞葉 すぐに分かりました？

春 あはい。…いや、実は最初、刑務所に行っちゃって。

詞葉 ああ、

春 そうしたら、そんな人はいないって言われて。慌てて確認したらこっちだった。

詞葉 普通そう思いますよね。

春 意外でした。いや意外っていうか、僕が無知なだけですけど。

詞葉 私も、ここに来るまでは。刑務所は、刑が執行されている人が入るじゃないですか。懲役刑とか禁

固刑とか。

春 ええ。私の刑は、まだ執行されていませんから。

詞葉 ……

春 ……だから、拘置所なんです。

詞葉 ……

春 ……なるほど。

詞葉 はい。

小さい沈黙。

春 初めて来ました。

詞葉 そうでしょうね。普通の人はなかなか。

春 (部屋を見回して) テレビとかで見るのとほとんど同じなんですネ。このアクリル板なんか(と、手を伸ばす)

詞葉 あっ、

春 え、

触るのは、

春 (手を引っ込めて) いけませんか。

詞葉 いえ、規則では特に。でも汚れると、後の人が嫌でしょう？

春 そうですね。

詞葉 時々ね、手の跡がついてるんです。よく見ると、こちら側と、そちら側から、1つずつ。ぴったりと合わせるようにして。手の大きさが全然違う時なんかは、男の人と女の人のかな、とか。そうなんですネ。

詞葉 こんなアクリル板越しに手を重ねたって、きっと冷たいだけなのに。

春 ……。

詞葉 (詞葉が来る前に春が触っていた箇所を指して) あ、ほらここ。

春 あ、

詞葉 誰かが触ったんですよ。(職員の方を振り返り) 先生、これからは拭いといってもらえます？

詞葉が職員の方を向いている間に、春は服の袖でアクリル板を拭く。

詞葉 (職員の返答に) さっき拭いたって、げんに汚れますから。お願いしますよ。(春に向き直って) すみません。

春 (間一髪戻って) あ、いえ。

詞葉 (職員を目で示して) 別に先生じゃないんですけどね。でも職員の方をそう呼ぶ習慣があつて。ええっと、何の話でしたっけ？

春 まだ何も。

詞葉 あれ、そうでした？ごめんなさい、こんなところにいると、あまり人と話す機会がないから。ちょっと浮かれてるのかもしれない。ニノマエさんが来てくれるの、楽しみにしてたんです。

春 あの、

詞葉 はい。

春 僕はなんて呼ばれたんでしょうか。

詞葉 ……。

春 どうしても気になって。いつもは古本さんとか会わないって聞いたものですから。

詞葉 ええ、
春 僕は支援者の会にはまだ入ったばかりで。まさかお会いできるとは、
詞葉 お名前、なんて読むんだろうな、って。
春 ……名前。
詞葉 はい。
春 なんだ、それだけだったんですね。
詞葉 ずっと気になってたんです。
春 ずっと？
詞葉 長年の謎が解けました。
春 ……前にどこかで？
詞葉 ニノマエさんのお芝居、拝見してます。
春 あ…：そうなんですか？え、うわ、そうですか。
詞葉 パンフレットのクレジットを見て。その時はペンネームかなって思ったんですけど。
春 ええ、
詞葉 このあいだ古本さんから名簿をもらったら、
春 ああ、
詞葉 絶対あの人だ、って。え、じゃあ本名ってこと？え、なんて読むの？って。
春 なるほど。どの作品をご覧になったんですか？
詞葉 タイトルは忘れちゃったんですけど、ファミリレストランが舞台の、
春 ああ、ずいぶん昔のだ。10年近く前ですよ。
詞葉 そりゃそうですよ。事件の前ですから。
春 ……。
詞葉 また観たいなって思うんですけど、ここからはもう出られないんで。
春 ……はい。
詞葉 お芝居、まだ続けてるんですか？
春 まあ、なんとか。
詞葉 大変ですよ、作家さんは。社会派っていうんですか？ニノマエさんの作風だと、たくさん調べなくちゃいけないでしょう？
春 好きでやってるんで。
詞葉 たくさん本を読んだり。
春 ええまあ、
詞葉 取材とか。
春 そうですね。
詞葉 次回作はどんなお話なんですか？
春 まだちゃんとは決まってるないんで。
詞葉 教えて下さいよ。だって絶対観られないんですよ？
春 まいったな。
詞葉 いいじゃないですか。題材だけでも、ね？

春 いや、ですから、
詞葉 私の事件でしょ。

春 ……
詞葉 支援者の会に入ったのは、取材が目的ですか？

春 いや僕は純粹に、
詞葉 古本さんは知ってるんですか？

春 ……
詞葉 あの人はお世話になってるんです。こんな私のために、本当に良くしてくださって。だから悲
しませるようなことは。

春 すみません。でも興味本位じゃないんです。どんな人か知りたくて、
詞葉 7人も殺した死刑囚は、どんな女だろう、って？

小さい沈黙。

詞葉 どうですか？

春 え、
詞葉 どんな人間に見えますか？

春 ……想像したのと違いました。
詞葉 想像？例えば？

春 髪の色とか。
詞葉 (笑って) 見た目ですか。

春 すみません。
詞葉 でもそうですね。けっこう自由なんですよ？服も自分のを着られるし、雑誌やお菓子を注文する
ことだってできます。特に労働させられるわけでもない。

春 そうなんですね。
詞葉 死刑囚の刑罰は殺されることですから。他の罰は受けないんです。

春 ……
詞葉 いったいどんな人を想像してたんですか？

春 なんとというか、少なくとも、いま目の前にいるあなたとは違う人を。だって、とてもそんなことを
したようには、

詞葉 そんなことをした。
春 ……

詞葉 らしいです。ご存じでしょうけど、事件のことは覚えてないので。
春 それは、本当なんですか。

詞葉 ……
春 警察から逃げようとして事故に遭ったんですよ。

詞葉 そう、聞きました。
春 そのせいで、数ヶ月間の記憶がないって。

詞葉 はい。

春 信じられない……。

詞葉 疑うのは当然です。裁判でも詐病じゃないかって、ずいぶん精神鑑定を受けましたから。そうじゃなくて。覚えてないんですよね？犯行の動機も、被害者とのやりとりも、殺した時のことも。

詞葉 覚えてません。

春 じゃあ何で受け入れられるんですか？今のあなたにとっては、全く身に覚えのないことでしょうか？

詞葉 あらゆる証拠から、私が犯人であることは明らかです。

春 ……。

詞葉 裁判で、証拠品のひとつひとつを見て、愕然としました……。だからね、本当は詐病かどうかなんて意味がないんですよ。嘘をついていても、覚えてなくても、事実は変わらないから。

詞葉は、職員の方を振り返って、

詞葉 すみません、終わります。

春 え？

詞葉、立ち上がり去ろうとする。

春 火口さん！

詞葉は立ち止まる。

春 あの、やっぱり取材させてもらえませんか。

詞葉 ですから、

春 お願います。火口さんを傷つけるような真似はしませんから。

詞葉 ……嘘ばかり。

春 え。

詞葉 私が観た舞台も、実際の事件を扱ったものでした。終演後に一悶着ありましたよね？

春 ああ、あの回をご覧になったんですか。

詞葉 「被害者が傷ついたらどうするんだ」っていうクレームでしたね。そのお客さんになって返したか、覚えてます？

春 いや、

詞葉 「傷つけないように書くけど、誰も傷つかない表現なんてないんです」

春 良いこと言いますね、俺。

詞葉 今でもはっきり覚えてます。

春 そうですか。

詞葉 お芝居はほとんど覚えてないけど。

春 そうですか。

詞葉 いま同じことが起きたら、どうします？

春 同じことを言いますよ。

詞葉 変わってないんですね。

春 いや、もうちょっと良い芝居つくれるようになってます。

詞葉 10年経っても忘れないような？

春 たぶん。

詞葉 ……ニノマエさんは、想像通りでした。

春 え、

詞葉 今日初めて会ったけど、もうずっと前に、あなたという人間には触れていたんですね。

春 ……取材させてください。

詞葉 ……。

春 もしかしたら火口さんを傷つけることがあるかもしれません。でも、あなたが芝居を通じて僕という人間に触れたように、僕も芝居をつくることであなたに触れられると思うんです。勝手なことを言ってると思うでしょうけど、でもきつとあなたにとっても、

詞葉 良いですよ。

春 え？

詞葉 良いですよ、取材。

春 ……本当ですか？

詞葉 ただし、条件があります。

春 はい。

詞葉 結婚してください。

春 え？

詞葉 私と結婚する。それが取材の条件です。

春は、呆気に取られて言葉を失う。

詞葉 あれ、もしかして奥さんが？

春 あいえ、今は。

詞葉 良かった。

詞葉に手で促されて春は座り、2人は再び向かい合う。

春 令和6年に、死刑についての法律が改正されたのはご存知ですか？

春 はい。あ、いや詳しくは。

詞葉 世界的な死刑廃止運動の流れから、死刑制度そのものの廃止はできない代わりに、死刑囚の人権配慮を強化するというものでした。特に大きく見直されたのは、刑が執行されるまでの流れです。

春 たしかそれまでは予告なしに、当日の朝、突然処刑されたんですね。

詞葉 今日殺されるかもしれない、明日殺されるかもしれないという毎日を、長い人では30年以上過ごしていた。それはあまりにも非人道的だということで、死刑確定から5年間限定の執行日選択権が与えられることになったんです。

春 執行日選択権……あれですか、自分が処刑される日を指定できるっていう。
詞葉 ええ、

春 けっこう議論になったのを覚えてますよ。選ばせるのは逆に残酷じゃないとか、いや正当な権利だとか、いつ殺されるか分からない恐怖も含めて死刑だからそんな権利はいらなとか。(目の前に当事者がいることを思い出し) あ、すみません……。

詞葉 ともかく法律は変わりました。この拘留所でも5年を終える前に、何人かが自ら処刑台に向かっています。

春 意外です。死にたくない人ばかりかと。

詞葉 そうでもないですよ。自暴自棄になった人、早く楽になりたい人、死をもって償いたい人、そもそも死刑になりたくて罪を犯した人だっていますから。

春 あの、それと結婚がどう……？

詞葉 執行日選択権を行使するためには、本人の父母、あるいは配偶者の同意が必要なんです。

春 ……まさか、

詞葉 私を殺してください。

小さな沈黙。

詞葉 父母とは、たぶん絶縁されたんだと思います。面会も、手紙の返事ありません。残るは配偶者だけなんです。

春 僕じゃなくても。支援者の会にも男性が、

詞葉 支援者の方々は、私の死を望んでません。ニノマエさんしかいないんです。

春 もしかして、最初からこれが目的で……？

詞葉 ごめんなさい。でもこれで、あなたの目的も叶います。

春はしばらく考え込む。やがて、

春 ……なぜですか。

詞葉 ……。

春 なぜ、死にたいんですか。

詞葉 これは、取材がもう始まったとらえていいんですか？

春 構いません。ただし、同意書にサインするのは全ての取材が終わってからです。

詞葉 分かりました。ただし、上演するのは私が死んだ後です。

春 いいでしょう。

詞葉、ひとつ息を吐く。

詞葉 思い出す前に死にたいんです。

春 ……。

詞葉 最近、少しずつ記憶が戻ってくるような気配がして。凄く濃い霧の向こうに、それまでは見えなかった影が見えるような感じで。思い出した時、私は私じゃいられなくなる。だからその前に、死にたいんです。

【2】

詞葉は上手へ去る。

春は誰もいない椅子を見つめる。

春 火口詞葉は、7人を殺害した罪で捕まった。被害者は20代から50代までの女性で、いずれも自

殺願望を持っていた。彼女はSNSで、死にたいけど死ぬ勇気がないという女性に対し、手助けをするを持ち掛けた。そのために借りたロフト付きのワンルームが犯行現場となる。酒と睡眠薬で意識朦朧とさせ、ロープを首に掛けると、ロフトの手すりを使って首を吊るした。もちろん目撃者がいないので、現場の状況から推察されたものだ。被害者と金銭のやりとりをした形跡はなく、一部では「善意の殺人鬼」と呼ばれた。

【3】

2人は椅子に座る。

しばし、客席方向にある壁を見ている。

春 ……泣き止んだみたいです。

詞葉 すみません、うるさくて。

春 いえ、

詞葉 教誨師の先生がいらっしゃってるんですけど、

春 ああ、お坊さんや神父さんが心のケアをしてくれるっていう。

詞葉 あの人、教誨の時いつもああなっちゃうんです。部屋でも、あ、わたし隣なんで。

春 ああ。

詞葉 夜中に寝てるとね、小さい声でお経が聞こえてくるんです。

春 お経？

詞葉 それも泣きながら。怖くないですか？教誨師の先生に言われたんでしょうけど。ここ半年ずっと。

春 半年。最近始めたんです。

詞葉 急に怖くなったんですよ。

春 怖い？

詞葉 あの人、もうすぐ5年だから。

春 ああ、
詞葉 5年が過ぎると、従来通りいつ刑が執行されてもおかしくないの
春 なるほど。それじゃあ、静かになったところで始めましょうか。
詞葉 あの、
春 はい。
詞葉 出してくれましたか？その……
春 婚姻届ですか？ええ、昨日。
詞葉 良かった。書類に不備がなかったか心配で。
春 大丈夫でしたよ。
詞葉 ごめんなさい、1人で行かせてしまつて。
春 いえ別に。
詞葉 一緒に行きたかつたんですけど、こればかりはどうにもこうにも。
春 (取材を始めようと) えっと、じゃあ、
詞葉 あの、
春 はい。
詞葉 実は私も教誨を受けてて。
春 はあ。
詞葉 キリスト教のプロテスタントなんですけど。
春 ええ、
詞葉 嫌ではないですか？
春 は？
詞葉 妻が、宗教に関わるのが。
春 ……いえ別に。
詞葉 (ほっとして) よかった。そういうのを嫌がる夫もいるでしょうから。
春 ……あとう、
詞葉 はい。
春 僕たちは、契約結婚ですよね？
詞葉 結婚とは心と心の契約です。
春 そういうのじゃなくて。執行日選択権を行使するための、形式的な結婚でしょう？
詞葉 表向きは。
春 逆です。表と裏が逆になっています。
詞葉 でも春さん、
春 それも。いつの間にかニノマエさんじゃなくなってる。
詞葉 だって私もニノマエだから。
春 もしかして……浮かれています？
詞葉 否めません。
春 ちよつと。
詞葉 昔から結婚に憧れがあったものですから。

春 しっかりしてください。お互いの目的のためでしょう？
詞葉 そうでした。

春 だから取材を。

詞葉 はい。あ、

春 え？

詞葉 また。

春 泣いてます？

詞葉 聞こえませんか？

春は耳を澄ますが、聞こえない。

春 いや、僕には。

詞葉 誰だって、死ぬのは怖いですよ。

春 火口さんも？

詞葉 そりゃそうですよ。

春 死にたいって言ってたじゃないですか。

詞葉 死にたくても、死ぬのが怖い人間だっていますよ。

春 あの7人みたいに？

小さい沈黙。

詞葉 そうですね。そういう意味では、私と彼女たちは同じなのかもしれません。

春 7人は、本当に死にたかったんでしょうか。

詞葉 ……。

春 本当に死にたかったら、人に頼らなくても死んだんじゃないでしょうか。

詞葉 怖がっているうちは本気じゃないって言いたいんですか？

春 そうかもしれません。

詞葉 春さんは、死にたいと思ったことは？

春 たぶん、ないと思います。

詞葉 でしょうね。

春 ……。

詞葉 裁判でね、ご遺族がお話になる機会があったんです。

春 はい。

詞葉 その被害者の方——ご遺族の娘さんは、調子の波が大きくて。自殺衝動に駆られることもあれば、なるべく前向きに生きようとする時もあった。……事件が起きたのは、比較的調子が良い時だったそうです。少なくとも周りには、そう見えていた。

春 ……。

詞葉 ご遺族はこう仰いました。「娘は、普通なら立たない崖っぷちに立つような真似をしたかもしれないな

い。死んでもいいと思ったかもしれない。でも決して、自分からは飛び降りなかった。他の人間が突き飛ばしたから死んだんです。それがなければ、娘はきつと今も、生きています」

春 ……

詞葉 どれだけ本気だったかなんて誰も分からない。たぶん、本人にも。ただ、私が殺したという事実だけが あるんです。

春 7人のこと、まったく覚えてないんですか。

詞葉 ええ、

春 取り調べや裁判で、写真を見たでしょう。

詞葉 見ましたけど、全然知らない人って感じで。

春 そうですか。

詞葉 じゃあ、私の番です。

春 え、

詞葉 私にも取材させてください。

春 僕をですか？

詞葉 一方的なのはずるいですよ。春さんのこと知りたいです。

春 分かりました。

詞葉 2回目なんですよね？

春 なにが？

詞葉 結婚。

春 ……そうですが、なんでそれを、

詞葉 こないだ、奥さんがいるのかを聞いたら、「いえ、今は」って。

春 ああ。若い時に一度。

詞葉 へえ。私は気にしませんよ、バツ1とか。

春 そうですか。

詞葉 え、どんな人ですか？

春 別にいいですよ。

詞葉 いいんですけど。え、なんで別れたんですか？

春 ご想像にお任せします。

詞葉 性の不一致？

春 なんて真っ先にそれが出てくるんですか。

詞葉 じゃあ、

春 (さえぎって) 僕の番です。

詞葉 はい。

春 再審請求しないんですか。

詞葉 ……あー、古本さんに頼まれました？

春 はい。説得してこい、と。

詞葉 すみません、余計なことに巻き込んで。

春 いえ、別に引き受けたわけじゃないですから。

詞葉 あの人諦めが悪いな。「ケンモホロロに断られた」って言えばいいですよ。あ、あと、「もう2度とそのことは言わないでほしい」って。これは私からの伝言。

春 なんでそこまで嫌がるんです？

詞葉 (困ったような笑みで)嫌っていうか、

春 やるだけの価値はあるって聞きましたけど。

詞葉 そんなの言ってるだけですよ。

春 古本さんたちが言うように、殺人罪ではなく同意殺人罪が適用されたら、死刑は免れるかもしれない。

詞葉 (苦笑して、指遊びをしながら)ああ、はい。

春 被害者と加害者の間に真摯な同意があったと認められたら、

詞葉 (吹き出すように笑って)真摯な同意。

春 (思わず止まる)

詞葉 え、春さんはしてほしいんですか、再審請求。

春 いや僕は、

詞葉 あったかどうか覚えていない真摯な同意があったと主張してまで私に生きてほしいですか！

春 ……。

詞葉 あの人たちは間違った判決だと信じて。腐った司法を正したい、ただそれだけなんです。私のことも、被害者のことも、ご遺族のことも考えてない！

小さい沈黙。

春 ……すみません。

詞葉 ……ごめんなさい、私の方こそ。いや、良くしてくださいですよ、ほんとに。

春 ええ、

詞葉 色々気に掛けてくださって。

春 はい。

詞葉 あの人たちに見捨てられたら…

春 ……。

詞葉 私のこと、死んでほしいって思ってる人、たくさんいますから。

春は、顔を上げ、詞葉を見つめた。

しかし詞葉はうつむき、春の目に気づかない。

時計の秒針が刻む音だけが響く。

詞葉 お芝居、何年くらいされてるんですか？

春 え、

詞葉 私の番。けっこう長いですよね？

春 そうですね、高校からなんで、20年ほど。

詞葉 え、長っ。じゃ始めた時に生まれた子が、もう成人してるってこと？
春 そうなりますね。そう考えると怖いな。

詞葉 ずっと同じ劇団で？

春 はい。高校の時のメンバーと、卒業してから立ち上げて。

詞葉 へえ、今も同じ人たちと？

春 いや、ほとんど辞めました。どこもそうなんですけど、30を過ぎたあたりで就職やら結婚やらで。残ってるのは僕と、もう1人だけ。

詞葉 前の奥さんとは、そこで？

春 ……ええ、一緒に芝居をしていました。

詞葉 女優さん？

春 まあ、

詞葉 じゃあ私、観てるのかも。あの舞台に出てました？

春 どうだったかな。

詞葉 え、思い出してくださいよ。

春 僕の番です。

詞葉 えー、早くないですか？

春 えっと、

春は言いかけて、口をつぐむ。

詞葉 いいですよ、気を遣わなくて。なんでも聞いてください。

春 (小さく頭を下げてから) 意識が戻って、事件のことを聞いたとき、どう思いました？

詞葉 どうって？

春 (ゆっくりと) どう思いました？

詞葉、少し考える。

そして当時の感覚を思い出すように、ぼつりぼつりと話し出す。

詞葉 最初はね、警察の方も、詳しいことは言わないですよ。たぶん、記憶の誘導になるから。

春 はい。

詞葉 少しずつ事件のことを知らされて。でもその時点では、私は巻き込まれたんだと思ってました。

春 はい。

詞葉 リハビリが始まってしばらくしても、記憶が戻らなくて。医者判断と、証拠が固まったタイミングでだと思えますけど、私が加害者だと知らされたんですね。

春 はい。

詞葉 ふっと、腑に落ちました。

春 ……。

詞葉 してもおかしくないな、って。

春 ……。

詞葉 思うのと行動するのは違うんで、そこはもちろん驚いたんですけど。

春 ……。

詞葉 人間には、死ぬ権利があるって思っているんです。

春 死ぬ権利。

詞葉 生きる権利と同じくらい、死ぬ権利が与えられるべきだ、って。

春 ……そうなのかもしれません。でも僕はやっぱり、大切な人には死んでほしくありません。

詞葉 それは、当然の感情だと思います。

春 ……。

詞葉 春さんは優しいですね。

春 そんなことないですよ。

詞葉 優しいです。

詞葉、斜め後方の職員に反応して、

詞葉 あ、はい。(春に)ごめんなさい、教誨師の先生が。

春 じゃあまた。

詞葉 また。

詞葉、去ろうとする。

春 あの、

詞葉、立ち止まり振り向く。

春 何か差し入れようと思うんですけど、お菓子とか。

詞葉 ああ、

春 でも、どんなのが好きか分からなくて。教えてもらえませんか。

詞葉 ……はい。

【4】

詞葉は上手へ去る。

春は誰もいない椅子を見つめる。

春 先進国で死刑制度が残っているのは、日本とアメリカ、それと韓国の3つだけ。だけど韓国では、

1997年を最後に、死刑執行は行われていない。アメリカでは50の州のうち、17州で死刑を廃止している。ヨーロッパでは、EUへの加盟条件に「死刑廃止」が盛り込まれている。その一方

で、日本での死刑制度を支持する声は根強く、一説には『忠臣蔵』をはじめとする、仇討ち（あだうち）を美徳とする文化のせいだとも言われている。そもそも近代になって、仇討ちを法律で禁止した際に、国家が代わりに仇（かたき）を取るという意味で導入したとされている。

【5】

2人は椅子に座る。

春 寒くなってきましたね。

詞葉 そうなんですか？ここにいと分らないから。

春 え、部屋も空調が効いてるんですか？

詞葉 そりゃそうですよ。

春 なんだ、てつきり。

詞葉 春さん、すっごい昔の監獄をイメージしてません？

春 正直そうでした。

詞葉 今あんなことしたら人権問題ですから。

春 あ、さつき差し入れを。

詞葉 いつもすみません。でも、毎回じゃなくてもいいですから。

春 大したあれじゃないんで。

詞葉 食べきれなくて山になってるんです。

春 あ、そうなんですか？

詞葉 そんなにたくさん食べないんで。

春 なんだ、何も言われないから全部食べてるのかと。

詞葉 そうだったんですか？

春 めちゃくちゃ食べるなあって。早く言ってくださいよ。

詞葉 部屋がね、4畳くらいの広さなんですけど。トイレと、布団と、あと着替えぐらいしかなくて。はい。

詞葉 窓は鉄格子がはまってて、ドアノブも付いてないんですよ。そういう殺風景な部屋に、お菓子が山積みになってるのが、ちょっと面白くて。（少し笑って）ごめんさい。

春 ……いえ。

詞葉 昨日も来てくれたんですよ？

春 え、

詞葉 差し入れだけ届いたから。

春 ああ、はい。

詞葉 なんで帰っちゃったんですか？

春 いや、

詞葉 せっかく来てくれたのに、なんで？

春 急用ができたものだから。

詞葉 あれがあったからでしょう。
春 ……

詞葉 帰ったんじゃないかって、帰らされた。
春 知ってたんですか。

詞葉 やっぱりそうなんだ。
春 え、

詞葉 ごめんなさい、鎌をかけました。私達には知らされないんです。動揺する人もいるから。
春 ……

詞葉 ごめんなさい。
春 なんで分かったんですか。

詞葉 夜が、静かだったんです。お経も、すすり泣く声も聞こえなかった。
春 それって…でもあの人、死ぬのが怖いって、

詞葉 今日で5年だったんです。執行日選択権が失われる最後の日に、サインした。
春 ……

詞葉 これは自殺なんでしょうか。それとも自殺を強要されたんでしょうか。
春 分かりません。

詞葉 あるいは、殺人なんでしょうか。
春 ……

時計の秒針が刻む音だけが響く。

春 大丈夫ですか。

詞葉 大丈夫じゃなかったら何かしてくれるんですか。

春は言葉に詰まる。

詞葉 ごめんなさい。取材、始めてください。

春 でも、
詞葉 大丈夫ですから。

春 ……分かりました。
詞葉 今日は何を話しましょうか。

春 それじゃあ、事件の前のことを。
詞葉 事件の前？

春 普通に生活していた時のことを。
詞葉 特別なことは何もないですよ？

詞葉 かまいません。そういうのこそ資料じゃ分かりませんから。
春 えっと、何から話したらいいんだろう……高校を出て、普通に働いて。その頃は一人暮らしをして
ましたね。節約も兼ねて自炊に凝って。

春 外食はしなかったんですか？

詞葉 たまあに友達と行くくらいですね。1人でお店に入るのが苦手なんで。
春 なるほど。友達は多かったですか？

詞葉 わざわざ会うのは何人かですよ。あとはSNSで繋がる程度。

春 彼氏は？

詞葉 それ、夫が聞きますか。

春 嫌だったら別に。

詞葉 まあ、何人かと可愛い恋愛をして、何人かと可愛くない恋愛を。

春 じゃあ、お休みの日は友達や彼氏と？

詞葉 ー、どっちかと言うと、1人でいることの方が多かったですよ。誰にも会わない時間がほしいんです。

春 そういう時、何してるんですか？

詞葉 なんだろ。マンガ読んだり、YouTube見たり。あとは実家に帰ったり。

春 近いんですか？

詞葉 電車ですぐですよ。飼ってた猫に会いたくて。あと、年の離れた妹がいるんです。

春 ああ、

詞葉 あの頃はまだ小学生で。もう大人になってるんだなあ。

春 猫はいつから飼ってるんですか？

詞葉 ……。

春 火口さん？

詞葉 なんてあんなことしたんだろう。

春 ……。

詞葉 こうやって思い返しても全然わからない。この日常のどこが、事件につながったんでしょうか。

小さい沈黙。

職員が詞葉に声をかけたらしく、春はそれに反応する。が、詞葉は黙ったまま。

春 火口さん？あの、

職員はもう一度詞葉に声を掛けるが返さないので、春が代わりに、

春 (職員に) 分かりました。(詞葉に) 今日は混んでるらしいんで、また来ます。

春が立ち上がろうとすると、

詞葉 春さんのお芝居、思い出したくて。

春 ……。

詞葉 でもどうしても、どんなお話だったのか思い出せなくて。でも思い出したくて。

春 はい。

詞葉 だから古本さんに頼んだんです。ネットから、公演記録とかを引っ張ってきてほしいって。それを見たら思い出せるんじゃないかって。

春 ……。

詞葉 その中に舞台写真があつて。俳優さんに、見覚えのある顔がいました。青いワンピースの、背の高い。

春 ……。

詞葉 取り調べや裁判で見た、写真の顔。

春 ……。

詞葉 春さんの、奥さんだった人ですか。

小さい沈黙。

春 すみません、黙ってて……。

詞葉 やっぱりそうなんですネ。

春 あの舞台は、彼女とつくった最後の作品でした。別れてからはそれぞれに芝居を続けて……しばらくして、事件が起きた。

詞葉 ……。

春 彼女は、自分から死ぬような人じゃなかった。なのに、どうしてこんなことになったんだろうって。

詞葉 殺したいですか、私のこと。

春 ……。

詞葉 いいですよ、サインしてください。そうすれば私を殺せます。

春 ……どうしたらいいのかわかりません。あなたの体は彼女を殺した。でもあなたの心はそれを忘れている。この思いはどこにぶつけたらいいんでしょうか。

詞葉 命です。

春 ……。

詞葉 体でも心でもない。私の命が、罪を犯した。それを奪うのが、死刑です。

【6】

詞葉は上手へ去る。

春は誰もいない椅子を見つめる。

春 火口詞葉の裁判で問題となったのは、事件の記憶がないことだった。刑罰を与えることで反省を促すという理念に対し、記憶がなければ反省も贖罪もできない。だからといって無罪にする理由もなかった。ただ、罪を覚えていない者への罰は、いったい何の意味があるのだろうか。彼女はそれを、なぜ受け入れるのだろうか。

春は、鞆から封筒を取り出し、見つめる。

春 ……。

封筒を、机に置いた。

冒頭と同じように、緊張した様子で、じっと待つ。

ふと、目の前のアクリル板に触れる。ここに初めて来た日と同じく、その存在を確かめるように触れる。

春 ……。

しばらくして、詞葉が現れた。

春 ご無沙汰しています。

詞葉 もう、会えないのかと思ってました。

春 何度かそこまでは来たんですが、

詞葉 知ってます。ずっと差し入れだけ届いたから。

詞葉は、封筒に気づく。

詞葉 それ、私が送った書類ですか。

春 はい、たしかに受け取りました。執行同意書と、離婚届。

詞葉 どちらでも、春さんの好きな方にサインしてください。

春 やっぱりそういうことなんですネ。

詞葉 どちらを選んでも受け入れます。

春 実はもうサインしました。今日はそれを届けに来たんです。

詞葉 そうですか。

春 ただその前に。せっかく久し振りに会ったんです。少し話しませんか。

詞葉 はい。

2人は、椅子に座る。

春 暖かくなってきましたね。

詞葉 そうなんですか？

春 ああ、分からないんですよ。

詞葉 でも、陽射しが変わったのは感じます。春が来たんですね。

春 それ。子供の頃、そう言うてからかわれました。

詞葉 あ、そっか。

春 春が来た、春が来た、って。

詞葉 (少し笑って)でも本当に、春が来ました。

静かな部屋で、お互いを見つめる。

春 ……新聞、読みました。

詞葉 ごめんなさい、びっくりさせちゃいましたよね。

春 あれは、本当のことなんですか？

詞葉 ここでは記事を読めないから。

春 ああ、

詞葉 でも、私が送った内容がそのまま載ったのなら、事実です。

春 1年ほど前に、事件の記憶が戻った、って。

詞葉 ええ、ほんの数秒間のことだけ。

春 ……。

詞葉 私はロープを引いていました。ロープの先には女の人。その体がぶらりと宙に浮いていて。すると

意識朦朧とした口から、「死にたくない」って言葉が漏れてきました。私は混乱して、怖くて、

どうしたらいいか分からなくて、もう後戻りできないって思って、ロープをさらに強く引いて。

春 ……。

詞葉 ここでもた、記憶は途切れます。

春 ……ちなみにそれは、その、

詞葉 春さんの、奥さんだった人じゃないですよ。

春 そうですか。(と、思わず安堵したこと) ……最低だな、俺は。

詞葉 最低なのは私です。今まで誰にも言えなかった。

春 だから、死刑になろうとしたんですね。

詞葉 ごめんなさい、黙ってて。

春 分かりました。

春は、封筒から紙を1枚出して、詞葉に差し出す。

詞葉は、執行同意書にサインがしてあるのを確認する。

詞葉 ありがとうございます。死をもって償います。

すると春は、封筒からもう1枚の紙を出して差し出す。

詞葉は、離婚届にサインがしてあるのを確認する。

詞葉 (両方を見て)え、え……どういうことですか？

春 自分で選んでください。人間には、生きる権利も、死ぬ権利もある。

詞葉 ……。

春 どちらを選んでも、僕は受け入れます。

小さい沈黙。

詞葉 ねえ、春さん。

春 はい。

詞葉 死んだらどうなると思います。

春 怖いから考えないようにしてます。

詞葉 なんですかそれ。

春 だって誰にも分からないんですよ？めちゃくちゃ怖いじゃないですか。

詞葉 この前、教誨師の先生に聞いたんですよ。そうしたら、エルサレム神殿には信仰も民族も関係なく、何の隔たりもなく人々が集う、「異邦人の庭」があるって。

春 異邦人の庭。

詞葉 それはきつと、あの世にもあるって。私は罪を犯してしまったけど、もし本当に何の隔たりもない場所があるなら、そこで会ってくれますか。

春 ……はい。

詞葉 ……ありがとう。その紙、預かっておいてください。私が自分で選ぶ日まで。

春 分かりました。

詞葉 (職員に) すみません、終わります。

詞葉、立ち上がる。

春 あの…：手を合わせてみませんか？

詞葉 手？

詞葉は、何のことか分からず合掌する。

春 そうじゃなくて。こっち側と、そっち側で。

詞葉 (アクリル板を指して) あ、これ？

春 はい。

詞葉 春さんと私で？

春 はい。

詞葉 ……いやあ、やめましょうよ。

春 え、なんですか。

詞葉 汚れちゃうし。

春 拭けばいいじゃないですか。

詞葉 やめときましよう、…：ね？

詞葉は去ろうとする。

春 あ、ちよ、火口さん！

詞葉 もうなんですか！

春 脚本、書き始めました。あなたの話。

詞葉 ……。

春 書き上がったたら読んでください。書き上がるまで、待っててください。

詞葉 分かりました。でも上演するのは、私が死んだ後ですよ。

春 分かっています。

詞葉 そんなに先じゃないと思います。

春 ……。

詞葉 だから、早くしてくださいね。

春 はい。じゃあまた。

詞葉 また、ここで。

詞葉、去った。

春はそれを見送ってから、紙を戻した封筒を鞆に入れ、出口へ。

ふと立ち止まると、振り返り、無人の面会室を眺める。

春 ……。

そして、去った。

終

※初演は令和元年でしたが、近未来を舞台とするため「令和6年に死刑制度改正」という台詞があります。
そのことから令和6年以降に上演する際には、その台詞の数字を適宜変更する必要があります。

上演許可等のお問い合わせは次にまでお願い致します。

Karuma_engeki@yahoo.co.jp